

煌めきと暗黒の記憶

チュット・カイ著、岡田知子訳

『追憶のカンボジア』

東京外国語大学出版社 二〇一四年六月

ディアスポラとしての記憶の記録と継承

本書『追憶のカンボジア』は、アジア文学の新たな息吹を伝える〈物語の島アジア〉シリーズ第二弾として出版された。現在七四歳になる在仏カンボジア人作家チュット・カイ氏が、三九歳で難民としてパリに渡る以前の、自然豊かな故郷カンボジアでの自伝的回想を元にした、郷愁とユーモアあふれる三篇の小説がおさめられている。本書は、カンボジア人以外の読者を対象とする著者初の翻訳書であり、世界に紹介されるきっかけとなるであろう。

現在、世界各地で故郷を離れて暮らすディアスポラによる文学が注目されている。カンボジアもまた、戦火の中で多くの難民を生み出した地である。特に、一九七五年四月から三年八カ月に及ぶ、極左共産主義のクメール・ルージュ政権（日本では一般に指導者の名前をとってポル・ポト政権と呼ぶ）下では、前政権の公務員、教員など国の将来を担う大多数の知識人が「革命の敵」として粛清され亡くなった。また、それまで尊ばれていた

た仏教、家族、教育など旧来の文化、社会制度が一夜にして否定され、徹底的に破壊の対象となった。辛くも生き残った知識人の多くも、フランスやアメリカなど各地に難民として離散した。

巻末の訳者解説によると、著者チュット・カイ氏は、フランス植民地時代末期の一九四〇年、カンボジア東部コンポンチャム州にある、メコン河の中州、ソムラオン島で生まれた。豊かな兼業農家の子であったが、兄弟十一人のうち公教育を受けたのは末子の彼だけであった。カイ氏の就学歴は、地元の寺院学校、フランス学校における初等教育から始まり、名門シハヌーク高等中学校、シソワット高等中学校を経て、大学教育まで受け大成した。クメール・ルージュ政権前には、法科経済大学学長としてエリート街道を歩んでおり、作家としても活躍していた。しかし、クメール・ルージュ政権下では、こうした華々しい経歴は偽らざるをえず、農民として息をひそめ、奇跡的に被害を免れた。亡くなった多くの同胞たちの鎮魂のため、将来にカンボジアの歴史の生きた記憶を継承するため、フランスではタクシー運転手をしながら時間をつくり、歴史の生き証人である自らの記憶を記録として紡ぐべく作品を生み出してきた。あふれんばかりのカンボジアへの思いは、後述するカイ氏の作品の中にある「母国」とは何か――の項から、ひしひしと伝わってくる。

特に一九七〇年代以降の共産主義、社会主義政権下での公的な歴史的記録は、プロパガンダ的であり、実際の人々の記憶がそこに寄せられているとは言い難い。往時のカンボジア人の記憶を元にした、政治的批判を含めながらのカンボジアの

経験——文化、社会の在り方を問う知的検証は、自由に発言できるカンボジア国外の地からだからこそ、早期より可能だったのではないか。カイ氏が先便をつけたこの文学を通じた知的生産が、今後も継承されていくことを期待したい。『ピエリア』（二〇一四年春号）に寄せられた「日本の読者への著者メッセージ」にある一文、「文化、文学、文字は偉大な力を持った剣として民族を守ることができる」と信じている」（六四）——は、暴力的時代をくぐり抜けた著者の言葉だけにおもく、そして力強い。

日本におけるカンボジア文学紹介のパイオニア

本書の訳者、岡田知子氏は、日本における稀有なカンボジア文学研究者として、国際的にも精力的な研究活動を行ってこられた。またカンボジア文学の様々な良作を、親しみやすいリズムミカルな翻訳で、日本に紹介されてきた。岡田氏の翻訳により、今日我々はこれまでのカンボジア近現代文学史と、対仏独立以降の激しい政治的変遷と厳しい統制のなかで苦闘してきた状況、また識字率が低く出版状況が難しくとも、脈々と銘うってこられた作家達の熱き思いを感じることができるといえる。

巻末の「訳者解説」は、こうした訳者の長年の研究の厚みが感じられ、読みごたえがある。著者カイ氏が、本書を書くに至った時代状況、場所などの背景について詳述されている。カンボジアの現代史に明るくない読者にとっては、この訳者解説を読んだから本文を読むと、歴史的背景がわかったうえで当時の状

況が理解でき、作品の奥行きがより深く味わえることであろう。

メコン河岸の故郷——コンポンチャム州の記憶

さて、本書の構成をみていく。本書には、著者自身の過去の事実を元にして書かれた三篇の小説——「寺の子ども」（二〇〇五）、「フランス学校の子ども」（二〇一〇）、「かわいい水牛の子」（二〇〇九）がおさめられている（括弧内はSIPARによる出版年）。いずれの話も舞台は、メコン河岸にある故郷、コンポンチャム州である。このうち最初の二篇が、寺院学校の寄宿舎で過ごした幼少期、フランス学校に進んだ少年時代の思い出について。最後の一篇は、その後日談として、成人し家庭を持った後、クメール・ルージュ政権の下、家族で各地を流浪する暗黒の日々について描かれている。

うち第一、第三篇は一九九〇年、在米カンボジア人向け新聞に掲載された。その後、第二篇も加えられ、各篇ごとにフランス系NGO SIPARによって、カンボジア国内で児童書のシリーズとして刊行された。無論内容的には、児童向けに特定して描かれたものではないが、自社会をユーモアを交えながらも内省的に捉える視点、少年期の葛藤と成長を描いた本作は、カンボジアの青少年が読むべきものである。

本書の舞台となる、カイ氏の物心ともに豊かな少年時代が育まれたコンポンチャム州は、カンボジアで随一の人口の多さを誇る。内戦以前より、メコン河岸に広がるトウモロコシやタバコ、マメなどの換金作物がとれる豊かな畑作地帯として知られ

る（二〇一三年に行政の合理化を理由として、州の東側がトゥポーン・クモム州として分割された）。州都コンポンチャム市は、ゆったりと流れるメコン河岸に接し、仏領期の瀟洒な建物の残る緑豊かな美しい都市である。植民地時代には、ゴム農園などの大規模なプランテーション、河川交通による商業も発達し、それまで治水等の関係であまりクメール人が居住していなかった大河メコン河沿いの自然堤防上や中州に華人、ベトナム人をはじめとする様々な民族の人が混住するようになった。それゆえ、本作のなかで、学校に集う子どもたちの背景も様々な民族、職業、経済状況が多面的に描かれ、マジヨリテイのクメール人社会一辺倒ではない、多様性を感じることができる。寺院の僧侶、檀家、船着き場の人、近隣の商家や村長など、子どもの世界を取り巻く大人の世界の事情も垣間見ることができ、コンポンチャム州は、このように内陸にありながら、河川、商業、多民族性を通じて、外部世界に開かれた空気のある土地柄である。カイ氏のユーモアあふれるおおらかな感覚が育まれたのも、こうしたゆつたりとした豊かで多面的な環境にあるであろう。「フランス学校の子ども」の中のエピソードには、「母国、この素晴らしきもの」とうとうと流れゆく河、静寂な濃緑の森、広々とした碁盤の目の水田」（九一）ときらめく情景が描かれる。

チユット・カイ氏と学校

さて、前半の二作品「寺の子ども」、「フランス学校の子ども」

も」から読み取れる、カンボジアの「学校」とは、どのような場所であろうか。本書に描かれている学校の校舎、様々な教師像、生徒像を通じて、立体的に浮かび上がってくる。カンボジアにおける公教育制度は、既存の読み書き等の教育をしていた寺子屋を基にして、仏領期に確立される。「寺のこども」の冒頭、カイの親友チャイの父親は、フランス植民地政府の政策で子どもを学校に行かせないと逮捕されると思い、あわてて寺院学校に進学させる。また著者の次の進学先を描いた「フランス学校の子ども」では、たびたび村人が、学校に通う子どもたちを「将来の役人」として期待の眼差しでみる場面がでてくる。仏領期において、フランス語教育は役人になる上で欠かせないものであり、フランス語を解する者とそうでない村人の目に見える世界が乖離している様子も伺える。

学校は、生きるのに必要な道徳教育の場でもあった。寺院学校時代、カイと親友チャイは、同じ州内の寺院の寄宿舎に泊まり僧侶の世話をしながら、基本的な読み書き、経典などを学んだ。上座仏教寺院は、子どもだけではなく大人の道徳的教育も担っていた社会の中心の場であった。子どもたちは、時に少年期特有の好奇心から規範を逸脱したいという誘惑にかられる。一方で、寺院での教育がしみこみ、後になってその対価としての罪と罰におびえもする。少年時代の日々が、時に排泄物のエピソードなどで笑いを取りつつ、ユーモアや恋心を交えて描かれる。カイ氏は前述の通り、内戦前作家であり、大学の学長にもなった教育者でもある。その造詣の深い教育者としての側面からの、教師とは、生徒とはどうあるべきか——といった問いかけは、時代や地域を超えて共通する課題である。

カンボジアの歴史観、国家観

「フランス学校の子ども」の中で、生徒に愛されている教師サオム先生は、「母国」という文章を教えた際、「『母国』(ミアトプム)とはどういう意味か」と質問した。生徒たちは、自分の住む村、カンボジアの山や川など具体的な身の回りに見えるものを答えた(一〇〇—一〇二)。サオム先生は、子どもたちに語りかける。

「お前たちが言ったことは全部正しいぞ。もう少し足すとすれば、『母国』っていうのは、寺や舟、牛や水牛の引く荷車だけじゃない。『母国』は、お前たちが毎日一生懸命勉強している文字や、ベトナム、タイ、ラオスとの国境や、カンボジアの知識人や作家たち、それから敵どもに取られないようにカンボジアの国土を守ろうとする勇氣、確かな独立心、真の愛国心、それからまっとうな誠実さだ。

『母国』は、お前たちや先生、そして金持ちだろうと貧乏人だろうと、偉いお役人だろうと、軍人だろうと、手足が不自由でも物乞いでも、とにかくカンボジア人みんなのことだ。『母国』は、ジャヤヴァルマン七世「アンコール王朝の最盛期を統治した王」のような素晴らしい將軍、指導者のことだ。『母国』は、自由があり、秩序正しく、統制がとれていることだ(一〇〇—一〇二)。

つまり、サオム先生によって説かれる「母国」とは、単純に出生した国ではなく、高潔な理想の国家、人間性としてすら描かれる。そういえば、クメール・ルージュの幹部らも、元は理想に燃える若き教師たちが中心であったことを思い出す。彼らの高邁な理想の国づくりは、どこで踏み外したのか。作中に時折、「クメール・ルージュ」の言葉を使用したことを謝る著者の姿が垣間見える。

サンは、フランス語で書類に記入し始めたが、両親の資産に関する質問のところでひっかかってしまった。というのも、サン
の両親は「貧農」——お詫び申し上げます。また、クメール・ルージュ用語です——ではなかったのだ(一一〇—一一一)。

ポル・ポト時代、それ以前からもあった言葉を、共産主義に適合した用語として改めて採用することもあれば、新しい造語もあった。言葉のもつ政治性を十分理解している著者でありながら、三年八カ月の間に身に沁みこんだ言葉は、嫌悪感を抱くものであるにも関わらず自分のボキャブラリーとして吸収されていることに、ハッと気づくのであろう。

次代への絶望と希望

三篇目の「水牛の子」では、大人になったカイ氏が家族を連れ、クメール・ルージュ政権末期の混乱により、移住を迫られ各地を放浪する日々が書かれる。そのような中、偶然『学校へ』

というフランス語の本を拾う。本を読みながら、その本で学んだ子ども時代を思い出し、ひとり笑っていると、ふと長女ニニタに「お父さんなんで笑っているの？ フランス語が読めるの？」「勉強したことがあるんだね」（二二〇）と言われる。「私は胸が詰まりそうだった。私のあとを継ぐ者は、目が見えない者となってしまうのだ」カイ氏と同じような近代的教育を受けられなかった我が子の状況に、心を痛める。

また長女ニニタは、どん底の中で希望も与えてくれた。出自を知られるのが怖く、隣人をも信じられない疑心暗鬼の日々のカイ氏であったが、娘ニニタと彼女を慕う水牛の子どもニニとの間に無償の親愛関係が築かれるのを目にする。クメール・ルージュ政権下で傷ついた信頼関係を取り戻し、時代の先に見える光が差し込むかのようなエピソードであり、作品のタイトルにもなっている。本篇のラストシーンでは、コンポンチャム州都から、生きるための仕事を探しに首都プノンペンへと旅立つ様子が描かれる。舟を待つ夜、「夕食が終わると私はニニタを連れて日が沈むのを見に行った。風がわずかに吹き、さざ波が岸に打ち寄せる。対岸は子供の頃、何年も住んでいたコンポンチャムの町だ。太陽が沈むと暗闇がバット川の岸辺を覆い、何も見えなくなった」（二二九）。楽しかった子ども時代を過ごした地を対岸から眺め、懐かしむとともに別れを告げ、また新たな世界へと旅立つ著者の決意が感じられる。

カイ氏がフランスで暮らすようになって三十年余、今日市場経済化で湧くカンボジアであるが、いまだ教育にアクセスできない農村地域の子どもの存在は大きい。そのような状況の中でも、かつてカイ少年が経験した先生方の金言のように、教

育には必ず子どもを照らす可能性があるはずである。内戦等を経て、カイ氏のような高齢の教育者の数は激減してしまっただが、それでもカンボジアの知識人による故郷への思い、教育観、国家観、など知るにあたり、本書のような書物を読むことは、深い洞察を得られ大いに参考になるに違いない。

（朝日由実子）